

『〔宋板〕傷寒論』書誌

真柳 誠

茨城大学大学院人文科学研究科

A Bibliographical Study on the Song Dynasty Edition of Shanghanlun

¹MAYANAGI Makoto¹College of Humanities, Ibaraki University

Shanghanlun is a medical text published by the Jiaozhengyishuju in 1065 A.D. during the Northern Song dynasty. The first edition featured larger characters but in 1088, a version with smaller characters was published with reduced price. This study compared various versions of Shanghanlun to clarify its system. Especially the alteration in the Chinese version by Zhao Kai Mei was comparatively analysed by the shape of letters and specific marks. Also, information on the various publications in Japan is included in this study, which we believe will be the logical outline for comprehensive understanding on the propagation and progression of Shanghanlun in East Asian region.

Key words : Shanghanlun(傷寒論)

一 趙開美本の概要

はじめに

『傷寒論』は北宋校正医書局・林億らの校訂を経て治平二年(一〇六五)にはじめて刊行物となり、その版式と文字の大きさから「大字本」と呼ばれた。これは高価だったので、元祐三年(一〇八八)には勅命で開封の国子監と浙路の郡齋よりおのおの小型の「小字本」が廉価で出版(1)されたが、南宋代さらに復刻された形跡はない。むしろ現代に伝わる各種『傷寒論』はすべて北宋版に由来するが、この大字本一種・小字本二種の北宋版さらに宋版以前の写本などは、いづれも今に伝わらない。

現在に宋版の姿を伝えるのは、明の趙開美が万曆二十七年(一五九九)に序を記し、『仲景全書』に編入した『〔翻刻宋板〕傷寒論』である。それは趙開美の序に、「宋板傷寒論を得た……ので仲景全書に并刻する」とあり、仲景全書目録の冒頭には「翻刻宋板傷寒論全文」と記されるからである。また趙開美本には小字本『傷寒論』の牒文があるので、この翻刻に用いられた底本は北宋小字本系とわかる。各巻末には「世讓堂翻宋板」などの木記もあるので、底本が宋版だった可能性は高い。これゆえ趙開美本は「宋板(版)傷寒論」とも称されるが、もちろん宋版そのものではない。さらに各巻頭には「仲景全書第幾」と「明趙開美校刻/沈琳全校」が付加されるので、宋版を忠実に模刻した仿宋版でもない。

ちなみ通常の仿宋版ならば宋版の刻工名も下象鼻に模刻さ

접수 ▶ 2009년 9월 8일 수정 ▶ 2009년 9월 14일 채택 ▶ 2009년 9월 18일
교신저자 ▶ 眞柳 誠 茨城大学大学院人文科学研究科
Tel·Fax: +81-29-228-8194 E-mail: makoto@mx.ibaraki.ac.jp

れるが、趙開美本にはない。その書型と文字はたしかに小字本のサイズではあるが、書式は毎葉二〇行・行一九字と大字本のスタイルで、いささか不自然さを感じさせる。他方、趙開美本『金匱要略』は元の鄧珍版を主底本とするが、版式・書式・字句は相当に改変されている。以上を併考するなら、「校刻」と明言する趙開美の姿勢も安易には信用できないだろう。しかも吳遷本『金匱要略』の新出で、北宋政府は小字本段階でも大規模な再校訂を加えていたことが知られた。ならば趙開美本の底本とされた小字本『傷寒論』も、北宋の大字本からさらに校訂が加えられた版本だった可能性を考えておくべきだろう。

さて趙開美『仲景全書』には、他に『金匱要略』『注解傷寒論』『傷寒類証』が収められ、計四書からなる。別に『集注傷寒論』『金匱要略』『傷寒類証』からなる三書の『仲景全書』が江戸前期に作成され、五回刊行された。その第四版にもとづき、さらに『傷寒明理論・藥方論』『運氣掌訣録』を加えた五書の『仲景全書』が清末に作成され、民国時代までに六回刊行されている(2)。これら三種の『仲景全書』は混同されることが多いので、注意しなければならない。

一方、国立公文書館内閣文庫所蔵の趙開美『仲景全書』は、江戸幕府の紅葉山文庫へ承応元年(一六五二)に収蔵された記録(3)があり、その少し前に中国から長崎に輸入されたと推定される。また江戸時代には『仲景全書』から単行された『宋板』傷寒論の版本四種があり、うち紅葉山文庫本を安政三年(一八五六)に影刻した堀川本は中国でも普及した。一九二三年に上海の惲鉄樵(商務印書館)や一九三一年に上海中医書局が出版した『宋板』傷寒論は、堀川本の返り点を消去して影印したものであることを小曾戸氏が検証し(4)、馬氏(5)もそれを引用する。一九五四年の重慶人民出版社『新輯宋本』傷寒論と一九八二年の湖南科学技術出版社『宋本傷寒論校注』も、文字の特徴から堀川本にもとづいている。

二 趙開美『仲景全書』の三版本

かつて趙開美本『仲景全書』の現存はあまり知られていなかった。このため前述の紅葉山文庫本が幕末の『経籍訪古志』に著録(6)されて以来、中国でも注目されてきた。ただし現在では、故宮博物院(台北)・中国国家図書館(北京)・中国中医科学院(北京)・中国科学院(北京)・北京

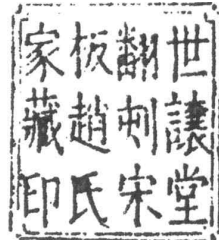


図1 卷4末尾の木記
(中国中医科学院蔵本)

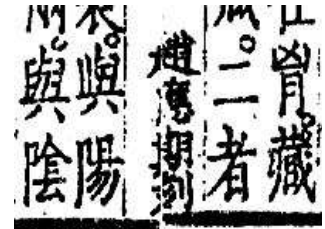


図2 『注解傷寒論』卷4第1葉下象鼻の刻工名(中国中医科学院蔵本)

中医薬大学・上海中医薬大学・上海図書館・南京図書館・中国医科大学(瀋陽)・中山大学(広州)に、趙開美本ないし万暦刊本が各一組あると目録書に著録される。そこで全点につき実地調査(7)したところ、中国科学院・北京中医薬大学・南京図書館の各本は和刻『仲景全書』だった。中山大学本は明・文陸閣校刊本と著録されるが、前述した清末版『仲景全書』の広東修刻本だった。中国国家図書館には原本がなく、所蔵されるのは旧北平図書館本(現台北故宮本)のマイクロフィルムだった。さらに内閣文庫本とよく似るが、明らかに別版の趙開美版二種が知られた。第一種A版は中国中医科学院・上海図書館・上海中医薬大学の各蔵本、第二種B版は中国医科大学蔵の先印本と台北故宮蔵の後印本である。

このA版・B版の『宋板』傷寒論には、「世讓堂／翻刻宋／板趙氏／家蔵印」(図1)「世讓堂／翻宋板」の木記と「長洲趙應期独刻」の刊記があり、各巻末の末行には「傷寒論卷第幾」が刻入される。が、それらの一部は現存各本で印刷不鮮明となっている。また版心はすべて白魚尾で、『注解傷寒論』の下象鼻には「趙應期刻」(図2)「其(期)」「姚甫刻」「甫」、『傷寒類証』には「姑蘇趙應期刊」の刻工名がみえる。

以上の木記からすると「世讓堂」が宋板を翻刻し、「趙氏」が版木を家蔵して印刷したことになる。しかし趙開美の室号は脈望館で(2)、彼ないし親族が世讓堂という室号などを使った記録は発見できない。一方、刊記からすると『宋板』傷寒論は長洲(蘇州郊外)の趙應期が一人で刻板している。刻工名からすると『注解傷寒論』は趙應期と姚甫が分担し、『傷寒類証』は姑蘇(蘇州の別名)の趙應期が刻板したとわかる。この趙應期は趙應・趙應其・趙應麒とも署名する蘇州の刻工で、嘉靖末期から万暦にかけて活躍し、趙開美の脈望館が出版した『東坡先生志林』『新唐書糾謬』に参加したことが知られている(8)。たしかに万暦間の趙

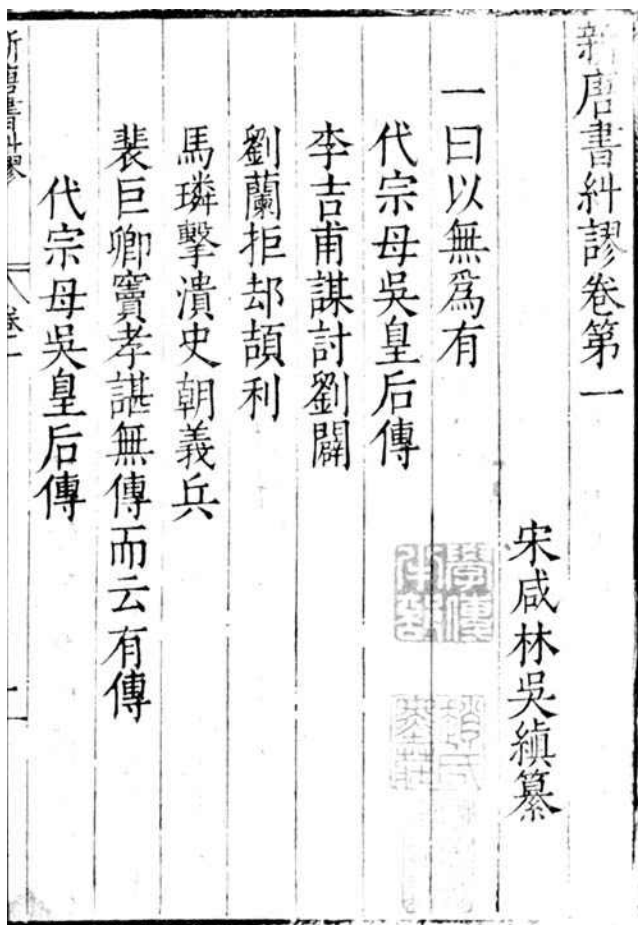


図3 趙開美校刊『新唐書糾謬』(國家圖書館〔台北〕藏本、書号01551)

開美校刊『新唐書糾謬』の卷二十末尾には「海虞趙開美校刊本／新唐書糾謬卷第二十 長洲／顧植書／趙應期刻」の刊記があり、その刻字(図3)はA・B版『〔宋板〕傷寒論』とよく似る。ならば「世讓堂」は趙應期の工房名と推定され、これを記すA・B版は、彼に刻版をしばしば依頼した趙開美の版本と判断してまちがいない。さらに両版は版木や罫線の割れ方まで一致しており、基本的には同一版木で印刷されている。

にもかかわらず両『〔宋板〕傷寒論』は三か所で文字が異なる。特徴的な部分は卷一第一〇葉ウラ第二行末尾の小字割注で、A版は「腎謂所／勝脾。脾／……」、B版は「腎為脾／所勝。脾／……」に作る(図4)。よくみるとA版の「謂所／勝脾」を、B版は埋め木で「為脾／所勝」に彫りなおしている。為と謂が音通するため生じた訛字であろうが、文意もB版が通る。またB版は全体にA版より、版木の摩耗や断裂がすすんでいる。ならばA版が初版で、B版はその修刻本にまちがいない(9)。

一方、内閣文庫のC版は書式などがA・B版と同一である

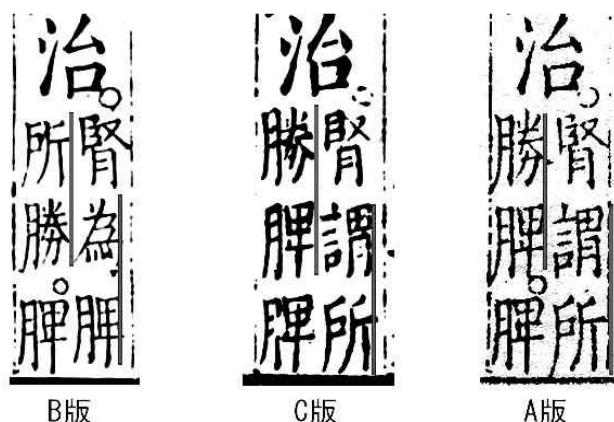


図4 趙開美A・B・C各版の相違(A:中醫學院本 B:台北故宮本 C:内閣文庫本)

が、一部版心は黒魚尾で異なる。刻字も似るが、よくみると違う。さらにA・B版にある木記・刊記・刻工名が一切なく、不詳文字を未刻の墨丁にするなど、『仲景全書』全体でA・B版とは百か所以上の相違があり、完全な別版だった。相違の大多数はC版の誤刻などに係る。他方、図4の小字割注を「謂所／勝脾」に彫るなどの特徴から、A版を底本に翻刻したのがC版とわかる。C版は一六五二年に紅葉山文庫へ入庫したので、おそらく明末清初の刊行だろう。当然ながら趙開美の所刊とは考えられないが、とりあえず本稿では趙開美本の一つとしてC版と呼んできた。

なおA・B・C版ともに、本文と同一の版式・刻字で無記名・無記年の「傷寒論後序」一葉があり、ある意見では林億らの作とする。当後序は中医科学院・上海図書館のA本と台北故宮のB本で『〔宋板〕傷寒論』の書末、中国医科大学のB本で『注解傷寒論』嚴器之序の前、内閣文庫のC本で同上嚴器之序の後に綴じ込まれている。この混乱は無記名のゆえだろう。しかし文中に成無己や『注解傷寒論』への言及が一切なく、文末に「附于卷之末云」と記すので、やはり『〔宋板〕傷寒論』への後序と思われる。内容は仲景の傷寒治療をたたえる一方、孫思邈(『千金翼方』)の傷寒治療が仲景の意に反すると厳しく指弾する。ところで一〇六五年に『傷寒論』を校刊した林億らが、翌年校刊した孫思邈『千金方』『千金翼方』の準備もほぼ同時に進めていたことは、各書の校勘注記からわかる。その彼らが孫思邈を批判するであろうか。書式や語彙・口調も、皇帝に献上する書に記す官僚の文章とは思えない。とするならば、後序の作者は趙開美と考えるのが妥当だろう。

以上の調査・検討より、趙開美本B版の『〔宋板〕傷寒論』を最善とみとめた。よって明確な規定がある台北の国立

故宮博物院より版權を取得し、本書に影印と翻字を載せることにした。むろんB版は、かつて中国でも台湾でも復刻されていない。ただし台北故宮本は版木の摩耗などにより、印刷の不鮮明な文字が一部にある。これらについては翻字で処理したが、詳細は凡例を参照されたい。

三 趙開美本系『傷寒論』の諸版

趙開美本『傷寒論』以外にも、これに由来する版本が後世出現している。多くが宋板や宋本をうたい、その幾版かは復刻され、これまで使用されてきた。どれが真本か知られていなかったためである。しかし、いまA・B・C各版の存在が明らかとなった。そこで後世諸版との関係(10)を概説しておこう。

①『集注傷寒論』と和刻『仲景全書』本

清初の張卿子『集注傷寒論』は、成無己から張卿子まで全二六家の注を集成するが、経文はB版の『〔宋板〕傷寒論』と『注解傷寒論』双方にもとづいている。

一方、本書は趙開美本『〔宋板〕傷寒論』『注解傷寒論』両書の代わりとして、万治二年(一六五九)初版の和刻『仲景全書』に収められている。この結果、和刻『仲景全書』は三書本となった。その際、『集注傷寒論』の上欄に「宋板」「成本」との経文校異が日本で刻入されており、この頭注はC版にもとづく。当版は寛文八年(一六六八)・宝暦六年(一七五六)・同年に二版)・寛政元年(一七八九)にも、初版の版木で後印された。

また成都の鄧少如は宝暦六年再印の三書本『仲景全書』にもとづき、さらに二書を加えた五書本『仲景全書』を光緒二十年(一八九四)に出版している。当五書本は清末民国間に計六回刊行されたため、かなり普及した。

②岡嶋玄亭『〔宋板〕傷寒論』

当版は寛文八年(一六六八)の初版で、後印本・復刻本もある。その全文はC版にもとづくが、一部は①本の経文で改めたらしい。

③浅野元甫『〔校正宋板〕傷寒論』

寛政九年(一七九七)刊の当版は、趙開美本の書式を大きく改める。節略も多くて字句の由来は判然としないが、おそ

らく②本による。

④稲葉元熙『〔新校宋板〕傷寒論』

天保十五年(一八四四)刊の当版も節略が多く、趙開美本の版式まで失う。字句はおおむね②本にもとづき、他に①本の経文も参照している。昭和に一回影印出版された。

⑤堀川舟庵『〔翻刻宋版(影刻宋本)〕傷寒論』

安政三年(一八五六)刊の当版は、紅葉山文庫のC版に直接もとづくが、一部字句を①本ないし②本で改めている。影印本が民国間に二回、昭和に三回、平成に一回出版された。

⑥武昌医館叢書本『傷寒論』

当版は民国元年(一九一二)に刊行され、後印本もある。底本は小島尚真による紅葉山文庫C版の影写本で、これを明治初期に来日した楊守敬が購入した。彼は帰国後、趙開美の付加と判断した部分を切り落とし、また小島影写C版『注解傷寒論』の目録も利用し、双方を貼り合わせて版下とした。さらに一部字句を②③⑤本で改め、宋版風の字様で刻板したのが⑥本である。その作業は仿宋版の捏造というしかない。

このように「宋板」などをうたう『傷寒論』は、いずれも主にC版に由来していた。むろん趙開美真本のA・B版に及ぶ版本は一点もない。したがって今後は、誤刻が最少のB版をテキストとすべきである。

四 復刻底本の来歴

本書に復刻した『〔宋板〕傷寒論』は、いま台北・国立故宮博物院の図書文献館に架蔵されるB版『仲景全書』所収本である。この書中と表紙には、「務本堂(陰刻・陽刻の二種)」「神農遺業」「姜問岐印」「秋農」「東海仙臺室蔵」「渠翁」「大徐」「国立北平図書館所蔵」の旧蔵印記がある。游氏らの報告(11)によると、うち「姜問岐印」「秋農」は清後期の医家・姜問岐、「渠翁」「大徐」は清末の官僚で民国初の蔵書家・徐坊(矩庵、一八六四~一九一六)のものだった。また帙には「仲景全書 万曆己亥趙清常/景宋刻本 坊」を墨書した題箋、『〔宋板〕傷寒論』には矩庵と坊を署名する題記二文があり、いずれも所筆は同一で徐坊本人のものにまちがない。彼の題記二文にはこうある。小字双行文は〔 〕内に示した。

傷寒論世無善本、余所藏治平官刊大字景写本而外、惟此趙清常（趙開美）本耳。亡友宗室伯兮祭酒曾懸重金購此本、不可得、僅得日本安政丙辰覆刻本〔近蜀中又有刻本、亦從日本本出〕。今夏從廠賈魏子敏得此本、完好無欠、惜伯兮不及見矣。坊記〔時戊申中秋日戊辰〕。「(印記) 渠翁」

北宋人官刻經注皆大字、單疏皆小字、所以別尊卑也。治平官本傷寒論乃大字、經也。千金方外台秘要皆小字、疏也。林億諸人深於醫矣。南宋已後、烏足知此。矩庵又記。「(印記) 大徐」

この第一文では安政丙辰（三年刊堀川）本を記し、蜀中（成都・鄧少如の光緒二十年）刊『仲景全書』が和刻本によることも言及する。ならば徐坊が題記を認めた「戊申」とは、光緒三十四年（一九〇八）にまちがいない。この時期、彼は北京で国子監丞の官に就いていたので、一九〇八年の夏に「廠賈魏子敏」から得たというは、琉璃廠の古書商・魏子敏からだったとわかる。徐坊の蔵書は没後の一九二七年から目録販売されたというので(11)、『仲景全書』もそのころ徐家から離れたのだらう。

なお台北故宮の『仲景全書』は他の文物と異なり、明代や清代から北京の故宮にあったものではない。蔵印記があるように、もとは北平図書館の蔵書だった。北平図書館の前身は清末の宣統元年（一九〇九）、北京に開設された京師図書館である。まもなく辛亥革命で民国政府の所管となり、一九二八年に国立北平図書館と改名された。その所蔵典籍の多くは戦乱をさけ、一九四一年より米国会図書館で保管された。このとき撮影されたマイクロフィルムが中国に寄贈され、いま中国国家図書館所蔵本として誤って著録されている。

他方、民国政府が南京に設立した中央図書館は、一九四九年から台北へ移転され、一九六六年に国家図書館〔台北〕と改称された。その中央図書館時代の一九六五年、米国会図書館より旧北平図書館本が移管された。さらに一九六八年、旧北平図書館本だけ故宮博物院に一括移管され、現在にいたっている(12)。

当『仲景全書』は以上のように、未詳氏→姜問岐→魏子敏→徐坊→北京の北平図書館→ワシントンの米国会図書館→台北の中央図書館と移動し、いま台北の故宮博物院に保存されているのである。

ところで徐坊の第一題記は注目すべきことを記す。他にも『傷寒論』の「治平官刊大字景（影）写本」を所蔵するというのである。彼は趙開美本を入手したので、その国子監牒文で小字本『傷寒論』の存在と出版目的も知ったであろう。に

もかかわらず第二題記で、『傷寒論』は「經」なので尊んで大字本、『千金方』『外台秘要方』は「疏」なので卑しんで小字本として北宋政府が出版した、などと曲筆する。つまり彼は趙開美本『〔宋板〕傷寒論』が小字本系であるのに気づかず、毎葉二〇行・行一九字の書式から大字本系と判断した可能性が高い。そう判断していたのなら、彼が所蔵していた「治平官刊大字景写本」も、趙開美本と似た書式だったと思われる。

一方、武昌医館本『傷寒論』は一九一二年の刊行だが、その版下は楊守敬が趙開美C版の影写本から宋版風に捏造したと前述した。これゆえ武昌医館本の書式は趙開美本と同一になっている。また彼は武昌医館本とほぼ同じ図版を自編の『留真譜初編』（一九〇一刊）に載せ、同年刊の自著『日本訪書志』では日本で入手したという「影（写）北宋本傷寒論」を縷々自慢する。その虚構は小曾戸氏（4）と筆者（13）がすでに指摘したが、一九〇一年以前に彼のいう「影北宋本傷寒論」の製作が完成していたのはうたがいない。

筆者は徐坊の「治平官刊大字景写本」にも注目し、これまで中国・台湾の主要蔵書を調査してきた。しかし、いまだに該当する書は発見できない。他方、楊守敬は『留真譜』と『日本訪書志』をあたかも販書カタログとし、蔵書やその精緻な模写本を譲渡していた。そして彼のいう「影北宋本傷寒論」の実物はいま国家図書館〔台北〕にある切り貼り本なので、希望者には模写本を譲渡するしかなかったらう。

これら諸情況から推すと、徐坊が一九〇八年夏以前に入手していた「治平官刊大字景写本」とは、楊守敬の偽「影北宋本傷寒論」に幻惑された言辞だった可能性がある。もちろん真の大字影写本がいつか出現するのを筆者も期待するが、現段階で趙開美本B版が最善本であることはゆるぎないと考えらる。

文献と注

- (1) 「小字体」の刊刻経緯などは、趙開美『仲景全書』所収『〔宋板〕傷寒論』前付の牒文に詳しい。
- (2) 眞柳誠「『仲景全書』解題」、小曾戸洋・眞柳誠『和刻漢籍医書集成』第一六輯所収、東京・エンタプライズ、一九九二
- (3) 眞柳誠・友部和弘「中國医籍渡來年代總目錄（江戸期）」、國際日本文化研究センター紀要『日本研究』七号一七三頁、一九九二

- (4) 小曾戸洋「楊守敬『日本訪書志』『留眞譜』所載「影北宋本傷寒論の檢証」一附説・現行影趙開美本傷寒論懷疑」『傷寒論醫學の繼承と發展—仲景學說シンポジウム記録』四八～五二頁、市川・東洋學術出版社、一九八三
- (5) 馬繼興『中医文獻學』一二五頁、上海・上海科學技術出版社、一九九〇
- (6) 森立之ら『經籍訪古志』、『近世漢方醫學書集成 五三』三九二～三九三頁、東京・名著出版、一九八一
- (7) 眞柳誠「趙開美の『仲景全書』と『宋板傷寒論』」『日本医史學雜誌』五二卷一號一四四～一四五頁、二〇〇六
- (8) 瞿晚良『中國古籍版刻辭典』四二一頁、濟南・濟魯出版社、一九九九
- (9) 他に卷二第一〇葉オモテ第一行第一一文字をA版は「病」でB版は「痛」、卷二第一四葉オモテ第三行第一一文字をA版は「離」でB版は「瀉」に作り、いずれも文意はB版が通る。
- (10) 眞柳誠「『宋板傷寒論』系諸版の検討」『日本医史學雜誌』五四卷二號一五七頁、二〇〇八
- (11) 游文仁・蘇奕彰「台北故宮館藏趙開美本『仲景全書』護頁題記作者考」『中華医史雜誌』三七卷二期九八～一〇三頁、二〇〇七
- (12) 眞柳誠「台湾訪書志 I 故宮博物院所藏の医藥古典籍(三五)」『漢方の臨床』五三卷一號二一六九頁、二〇〇六
- (13) 眞柳誠「楊守敬と小島家—古医籍の蒐集と校刊」『東方學報』八三冊一五七～二一八頁、二〇〇八